

【不安】がこじれて

病気には、命に関わらない軽いものもある。だが、体の異変を初めて感じたひとにしてみれば、さては重い病気ではないかと思ってしまう。

丁子さんは48歳、主婦。寒くなつてから、時々、頭がズーンと重たく感じるようになった。寝付きが悪く、眠りも浅い。体がだるい。血圧を測ってみると、ひどく高かったりする。ついに更年期かなどと、自分を納得させようとする。が、ちよつと待て。もしも頭の病気が原因で、手遅れになったら大変だ。居ても立ってもいられなくなった。

だが、いかなボンクラ医者でも、診察するまでもない。丁子さんの話を聞いただけで、「あっ、これは頭の病気ではない」と察しが付く。気温が下がり、自律神経に不調を来したのかもしれない。気象病の一種だ。夫がコロナ禍の中、テレワークで自宅にいる。相当にストレスが溜まっているようだ。こじりうのを社会病^①とも呼んでみるか。

確かに、ただの風邪だと思っていたら、実はくも膜下出血だったということもある。再出血して亡くなったひとも多いのだ。今どきのひとは、なかなか医者の言うことを信じてくれない。

というわけで、MRI（磁気共鳴画像装置）で頭の検査まですることになる。結果は、まったく異常なし。丁子さんが疑う高血圧による脳出血もない。脳動脈瘤^②もないから、この先、くも膜下出血になる心配もない。なぜか認知症はどうかと聞くから、ワッシャーが生きている間は保証することにした。人間、先のことは分からない。

重い病気ではないと分かって、丁子さんはニコニコ顔で帰っていった。ホツとす。こつこつ病気は最初が肝心だ。不安が残ると、こじれて治りにくくなる。患者さんは、あちこち医者を訪ね、軽い病気が重い病気のようになったりもする。

（石黒修三||いしぐろクリニック・脳神経外科専門医・11/17北國新聞掲載）